岳　1　月

宮坂静生
推　　薦

宝引のからみあひをる紐同士　小林貴子
落葉急巡礼の母子発ちしあと　古畑恒雄
鷹渡るグランドピアノ帆のごとし　宮岡光子
山祇に風磨かるる新豆腐　川村五子
行く秋の礁木下順二の忌　後藤行雄
鮟鱇の己がよだれに溺れたり　岩上諒磨
白鳥は影をたゝんで降りたるよ　倉科繁登
雁の竿過ぎゆく刻を惜しみをり　後藤冴子
鋳掛屋の火の凍む浜の浜払子（はまぼっす）　松本よし乃
稲滓火や蝦夷（えみし）の魂の透きとほり　山田一政
小鳥待つ月のみどりとなる日まで　田村道子
蒼天の背骨となりて鳥渡る　寺島芙美子
薄野に光の筋や夕ごころ　沖田泰子
秋めきて産湯のごとき瀬音かな　加藤律子
大太鼓とよもす浜や鮭供養　玉井利之

*

ちちろ鳴く京塗師たりし兄の室（むろ）　水野星闇
秋の蚊やもう亡骸にとまらずに　牧野　繭
こぼれ萩名字が変わりましたとさ　珠凪夕波
文化の日マンタの眼懐つこき　小宮山秀子
刈田道古人に出会ひさう　天野ユキ子
柊挿す鍛冶の名残の町工場　増田信雄
十二歳みんな仲良くできず冬　太田　薫
進むより刻む人生石蕗の花　飯田和子
母の待つ冬夕焼の向かう側　唐澤南海子
なけなしの背丈縮みぬ草の花　木次昌子
空へ落ちそうな丘行く紅葉狩　佐々木寿子

*

深雪晴父の遺品を母と焼く　重親利行
晩菊や慈愛のごとき陽の光　三村知壽
果物屋ともしび色に八一の忌　森　千恵子
葉葱派と根深派酒はみな万能　石井紀美子

岳俳句の現在　一月 ㊾⑨

――同人集・岳集・青雲集から

宮坂静生

巻頭寸言。新しい年を迎える。しかし、真から新しい感触は乏しい。世界の変動に曝されながら、日本は陽溜まりの中にいるようだ。とはいえ、暮らしは加速度を加え、記号化、デジタル化され、生の感覚から遠くなりつつある。どこで何が起こっているのか、わかるようでわからない。

いま何が大切か。早々に分かってしまわないこと。調子のいい、コマーシャルに乗らないこと。のっぺりした海坊主のような時代という怪物に流されないで、私の眼で見た、生な声を聞かせてほしい。

正月は遊びの余裕を――「宝引」という古季語

宝引のからみあひをる紐同士　小林　貴子

「宝引」は運動会で年寄りがやる宝引きのようなもの。紐や縄の先に当りの橙などを付けて引かせ、当った者に賞品を出す遊び。大名から庶民まで正月の愉しみであった。紐がからむところが女性などには演技の見せ場。ちょっと色っぽい。

鮟鱇の己がよだれに溺れたり　岩上　諒磨

若い作者にして俳意の可笑しみを捉えている。老成した感覚の働かせ方が実は若さの証拠。句材の拡がりに期待したい。

白鳥は影をたゝんで降りたるよ　倉科　繁登

技巧派の作者。老練であるが、早々、世の「軽み」調を出そうとしないところが大物である。何を捉えるのか、老いて期待を持たせるところがある。

雁の竿過ぎゆく刻を惜しみをり　後藤　冴子

今月の秀句

落葉急巡礼の母子発ちしあと　古畑　恒雄

母子で巡礼に出る。思いつめたこと、かなしいことがあったのであろう。父親を失ったものか。現代は封建時代のような不合理なことが許されない時代であるが、人間関係は昔と変わらない。何番札所か、そこで出会った母子の抱えた哀しみに作者は共感したのである。弱者の立場に心寄せる弁護士の良心が詠ませた作品であろう。

鷹渡るグランドピアノ帆のごとし　宮岡　光子

駅のピアノか。蓋を開けたグランドピアノから立ち上がるピアノ曲の響きは「帆」の比喩が相応しい。単にリアルな句でなく、言外の余白から感じられるイメージの作り方が巧みだ。明るく豪快な句である。

山祇に風磨かるる新豆腐　川村　五子

晩秋の寒さを山からの風に感じる。新しい豆腐が旨くなり出す頃だ。田から山へ帰った山の神が風に働きかけたものか。鄙びた地域の暮らしが山祇とともにある。骨が確か。

行く秋の礁木下順二の忌　後藤　行雄

木下順二の戯曲「子午線の祀り」は主人公平知盛を巡る平家滅亡を描く壇ノ浦が舞台。そこに降り立った作者の感慨か。悠々たる岩礁を捉え、「礁」に焦点を当てたのが印象深い。

雁が渡る短い時間であるが、長く描かれ、哀愁がある。伝統的な句材に臨む態度のとり方が巧い。ベテランだ。

鋳掛屋の火の凍む浜の浜払子　松本よし乃

四国宇和島在住の作者。浜払子はサクラソウ科、葉は多肉質、白花が総状花序をなす夏の花である。それが冬にも咲いている南国。海に向かい鋳掛屋がある。見事な光景ではないか。

稲滓火や蝦夷の魂の透きとほり　山田　一政

いい句である。紛れもなく蝦夷の地、東北を感じる。あれこれ注を付けないで、堂々たる一句をものした作者に敬意を表したい。努力家だ。秋田勢をまとめ、遠藤靖子ともども立派。

小鳥待つ月のみどりとなる日まで　田村　道子

月のみどりとは、月光が冴える秋を連想した。丁度その頃は小鳥が渡って来るという。詩人の才能がまろやかに発揮された句として愛誦したい。

蒼天の背骨となりて鳥渡る　寺島芙美子

「鳥渡る」は飾り物めいた句が多い。中で、掲句は秋天の

「背骨」に渡り鳥を配し、見事に季節の本質に迫った作である。作者の代表作の一句になろう。

薄野に光の筋や夕ごころ　沖田　泰子

晴れた晩秋のおだやかな夕べを捉え、哀感がある。

秋めきて産湯のごとき瀬音かな　加藤　律子

豊かな山川の瀬音を捉え「産湯」の比喩がいい。新鮮だ。

大太鼓とよもす浜や鮭供養　玉井　利之

今月の秀句

ちちろ鳴く京塗師たりし兄の室　水野　星闇

亡き兄であろう。好きでわが道を生きた兄。かつて兄の工房を覗いたことがある。腕はいい、一徹だった。惜しむらくは逝くには早かったと思う。ちちろを耳にすると兄の俤が蘇る、という句。

待つこと久しかった作者。詰めの甘さが句を軽くしていたが、今回はいい句が揃い、感心した。器用を見込んでみんなに頼られる。兄の生き方から学ぶことが多いのであろう。

村上から秋田まで、日本海岸の哀しい行事「鮭供養」にいい句が誕生した。太鼓を打つ浜人の心が感じられる。

ときに口語が新鮮――「名字が変わりましたとさ」

こぼれ萩名字が変わりましたとさ　珠凪　夕波

半ばからかい気分。あの子もとうとうね。「それはようざざんしたわねえ」あるいは「それはそれはよかよか」。こぼれ萩から、つい余分な冗談を。「また変えないでね」。

秋の蚊やもう亡骸にとまらずに　牧野　繭

覚めている。通夜であろうか。哀しみが深い。

文化の日マンタの眼懐つこき　小宮山秀子

マンタはエイ。動物園、あるいは水族館風景か。熱帯のマンタを日本で見ることができるのも大いに文化を感じる。

刈田道古人に出会ひさう　天野ユキ子

刈田道からの歴史感覚が鋭い。刈田道に格調を見出した。

柊挿す鍛冶屋名残の町工場　増田　信雄

鉄工場になっても節分の夜の魔除けの習いを大事にする律義さが文化であろう。地に足がしっかりついた句である。

十二歳みんな仲良くできず冬　太田　薫

六年生であろうか、好悪の感情が沈潜し、難しい学校教育の現場を内側から捉え続ける作者は先生。否定形が鋭い。

進むより刻む人生石蕗の花　飯田　和子

一日一日が人生。なるほどと深く納得させる。石蕗の花は見るたびに滋味がある。見事な照応であろう。

母の待つ冬夕焼の向かう側　唐澤南海子

他界も夕焼であろう。冬夕焼には夏の夕焼とは別な知性が感じられる。この世は死生一如。

なけなしの背丈縮みぬ草の花　木次　昌子

一センチでも惜しい。「なけなし」がいい。可愛くなったね。

空へ落ちそうな丘行く紅葉狩　佐々木寿子

「空へ落ちる」、夢中になって紅葉を愛でた、この不意なる感覚が面白い。空は真っ青。

青雲集

深雪晴父の遺品を母と焼く　重親　利行

無言で焼く。けじめをつけることで新たな供養が始まる。生前の父は厳格であったか、この雪の下の土に還る思い。

晩菊や慈愛のごとき陽の光　三村　知壽

気持がいい作である。作者の人柄が句に滲み出ている。

果物屋ともしび色に八一の忌　森　千恵子

會津八一の古雅の歌の趣がどことなく掲句にもある。「ともしび色」が懐かしい。十一月二十一日が命日。蜜柑、金柑、林檎など。バナナもまだメロンもある。木下夕爾の童画風。

葉葱派と根深派酒はみな万能　石井紀美子

原句は下五が「万能派」であったが、なんでもござれがいい。技巧派の面白さがある。意欲が感じられ、楽しみ。

他に岳集から推薦候補作を掲げる。

冷やかや開拓畑の月の色　小野　す美

南無胸に老々村の冬支度　渡辺　秀雄

初霜や野も山も身を低くせり　松澤　勝彦

推敲・添削 ㊹ ●●●●●●●●●● 宮坂　静生

○季語の用い方

原句　古日記あどけなくして愛しかり　　森　玲子

「古日記」は今まで書いていた今年の日記が終わったことから生まれた季語である。新年を迎えるに際して、前年の日記が「古日記」。掲句は作者のこの頃の連作の句を見ると、若い頃のご自分が書いた日記やお連合いの学生時代など、若かりし頃の日記を古日記と使われているようだ。確かに過去の日記は懐かしい。回想して詠いたい気分になる。ましてや、亡くなった夫君の日記には思いが深い。しかしこれは、季語「古日記」とすることは難しい。年が変わった途端に、書いていた日記が「古日記」の呼称で呼ばれるようになる新旧のマジック、おかしさ、愛しさを指すものと確かめておきたい。毎年、去年今年の時期になると「古日記」を拡大解釈した句に出会うので、ここで確認しておく。

○このように推敲し添削する

俳句は私の物語を作る。見ることで気づいた光景の描写も私の物語に必要なので、それを取り入れるのである。

原句　晩秋の風渦巻きて街の辻　　三村　知壽

添削　晩秋の風渦巻きてわが故郷

「街の辻」が平凡。ここで物語を作る。読んで楽しい光景を作り出し、作者も読み手も「それはいい」と共感し合う。

原句　句碑に満つ水仙の香と潮騒と（爪木崎）　大月　英晴

添削　爪木崎水仙の香と潮騒と

「句碑に満つ」が平凡。石仏や句碑を俳句に取り入れてもみんな同じ風景になり、変化がない。面白味がない。ここは注にある「爪木崎」を初めに出すと良い句になる。

原句　葉葱派と根深派酒は万能派　　石井紀美子

添削　葉葱派と根深派酒はみな万能

個性的な句で、着想が面白い。気になるのは下五。ここまで「派」で分類しないで、酒はみんな何でもいいくらいに。

原句　義父が逝き雑木林の庭に小鳥来る　　坂井　亮

添削　父が逝き雑木林に小鳥来る

「義父」「義母」は「父」「母」でいい。「雑木の庭」が面白いかどうか。私は「雑木林」でいいと思う。

原句　垣根より群れし乱れし野菊なり　　佐藤　悦雄

添削　垣根より溢れるばかり野菊なり

「群れし乱れし」が平凡。そこで幾分ことばを飾る。

原句　黄昏や萩の黄葉浮いて来よ　　山本　正子

添削　黄昏や萩の黄葉の浮き心地

萩への呼びかけより、黄昏を楽しむ気持を表現したら。

原句　秋の蚊に刺され寝不足温暖化　　松岡　善郎

添削　秋の蚊に刺され寝不足ひきずれり

温暖化で蚊が元気だが、そこまで言わなくとも分かる。

原句　無花果を取る木の上の八十才　　黒坂　愛子

添削　木にのぼり無花果を取る八十歳

いくら元気でも八十歳。大事な所でも骨折しないように。